



Title	浮世絵に描かれた小袖着衣形状についての定量的考察
Author(s)	森下, あおい
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 176-177
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

浮世絵に描かれた小袖着衣形状についての定量的考察

森下あおい／滋賀県立大学

本稿では江戸期女性の小袖着衣形状の変化を明らかにすることを目的として、浮世絵に描かれた女性の小袖着衣形状の特徴を定量化し、時期的推移を分析した。その結果、1) 浮世絵の小袖の着衣形状には帯幅がその他の部位の位置に大きく影響を及ぼしていること、2) 帯幅の推移は上端の位置が大きく、帯の下端の位置は変化が小さいこと、を指摘した。

1 はじめに

小袖は日本の風土や生活様式に調和しながら成立し、町人階層や遊里の女性によって着こなされ洗練度を深めた。小袖の着衣形状は残存した実物や文献¹⁾、描かれた絵画から見ると、裁断寸法や帯幅と着付け方と関わり合いつつ推移したと考えられる。一方、浮世絵は近世の初期風俗画を母胎として誕生し、江戸時代には複数の流派で多くの絵師が活躍した。浮世絵には当時の女性の小袖姿が数多く表現されているが、同じ時期に描かれた浮世絵には絵師が異なっても非常に類似した容姿が描かれている。つまり浮世絵の女性の容姿には時代ごとに流派を超えた典型が存在すると言える。このことは、その時期に実際に着用されていた小袖姿の女性を観察して描いていたことを示唆するものである。

2 資料および方法

資料は安土桃山時代から、江戸期と同様の手法による絵画が存在する明治初期までの、立位正面の女性の全身の小袖姿を描いている浮世絵84作品である。これらについて、作品が制作された時期や絵師が活躍した時期を考

慮しながら1600～1900年までを50年ごとに区切り、年代順にAからFの6つのグループに分類した²⁾。計測は正面の中心の位置で、首の付け根から衿あきまで、衿あきから帯の上端まで、帯の上端から帯の下端(帯幅)まで、帯の下端から足首の位置での裾まで、足首の位置での裾から絵画上に描かれた裾の下端までの各々の垂直の長さ、および袖口寸法の計6箇所について、定規により直接絵画で行った。

3 結果と考察

各計測項目実寸の推移をグループ別に表1に示す。なおすべて首付け根から足首までを100とする示数で表している。袖口の寸法は、当時の裁断寸法では寛文(1661～73)のころから次第に大きくなりはじめ、幕末近くには女性でほぼ今日の標準的な寸法に達したとされる³⁾⁴⁾⁵⁾。計測の結果でも、AからBへは僅かに小さくなっているが、その後はBやDで比較的大きい変化量を示しながら時代とともに徐々に広くなり、Fでは現代のきものとほぼ同じ寸法へと推移している。帯幅(帯の上端から下端)の寸法は、江戸初期には狭く、元禄以降に装飾的な目的の高まりにつれて広く腹部を覆うほどになり、江戸中期や後期以降は広幅に定着したとされる⁶⁾。今回の計測結果においても、江戸中期から後期には初期の約3倍近い幅になっていることから、浮世絵で計測した結果は、概ね裁断寸法における数値の推移を反映していると考えられる。これらの結果は、浮世絵に描かれた着衣形状が実際の小袖の寸法をある程度写しており、1

で述べたことを支持するものである。次に各着衣寸法の関係について眺める。帯幅の広い時期には、当然、帯の上端から首の付け根までの長さは短くなるが、その詳細を見ると、帯幅が狭い時期には衿あきから帯の上端は長く、帯幅が広い時期には短くなっている。このことにより帯幅と衿あきから帯の上端の間には、負の相関関係があると言える。一方、帯の位置については、帯の上端の位置は大きく変化しているが、帯の下端の位置にはあまり変化が見られない。この帯の下端の位置を筆者が先に行った浮世絵の体形分析値⁷⁾に対応させると、帯の下端は人体の腰の位置に対して上部に常に一定の関係にあることがわかった。帯の安定する位置が人体上で腰の高さになり、それが実際の着衣形状にも現れることは当然であるが、同じことが浮世絵上でも確認できたことは興味深い。このことは浮世絵がかなり写実的であることを意味する。

4 おわりに

小袖の着衣形状は水平方向に区切られる部位が多く、それが垂直方向のどの位置に現れ

るかに形態上の特徴が反映される。本稿では小袖の丈方向についての計測を行った結果、小袖の各部位の位置が帯幅と強く関連し合っ

参考文献

- 1 神谷栄子：日本の美術67，至文堂，34（1971）
- 2 小林忠，大久保純一：浮世絵の鑑賞知識，至文堂，224-252（2000）
- 3 別冊婦人画法：「きものの辞典」，世界文化社，4（1975）
- 4 土井幸代：和裁，同文書院，64（1980）
- 5 金沢康隆：江戸服飾史，青蛙社，87-90（1998）
- 6 山名邦和：日本衣服文化史要説，関西衣生活研究会，133-134（1973）
- 7 森下あおい，黒川隆夫：第9回公開シンポジウム人文科学とデータベース，51-60（2003）

表1 浮世絵における各着衣寸法（示数）の平均値（n=84）

制作年代 グループ	首の付け根 ～衿あき		衿あき ～帯の上端		帯の上端 ～帯の下端		帯の下端～足 首位での裾		足首位での裾 ～裾の下端		袖口	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
A(1600～1650)	3.08	2.42	32.56	2.99	6.65	1.45	57.76	2.95	8.02	1.78	9.88	1.82
B(1650～1700)	4.66	4.02	27.93	6.56	11.84	3.41	55.58	3.29	9.53	1.35	9.26	1.92
C(1700～1750)	5.11	1.20	15.61	2.87	14.10	1.65	65.18	4.13	11.05	2.02	11.09	1.97
D(1750～1800)	5.00	2.33	11.62	2.76	21.30	3.49	62.05	3.48	8.85	3.47	12.18	3.58
E(1800～1850)	3.75	2.81	15.67	4.87	22.32	2.99	58.27	3.61	14.31	4.19	14.36	6.61
F(1850～1900)	3.94	0.98	15.86	3.33	19.90	4.08	60.30	2.92	13.29	6.78	14.67	3.01
全資料平均	4.21	2.62	17.52	8.47	17.90	6.34	60.18	4.32	10.37	4.34	11.91	4.06